



Winter 12-15-2020

BYUキャンパスでの霊的な旅路

Yoshihiko Ariizumi

Brigham Young University - Provo, yariizumi@hotmail.com

Follow this and additional works at: <https://scholarsarchive.byu.edu/sproficiency>



Part of the [Educational Psychology Commons](#)

Recommended Citation

Ariizumi, Yoshihiko, "BYUキャンパスでの霊的な旅路" (2020). *Spiritual Proficiency*. 3.
<https://scholarsarchive.byu.edu/sproficiency/3>

This Article is brought to you for free and open access by the ANEL at BYU ScholarsArchive. It has been accepted for inclusion in *Spiritual Proficiency* by an authorized administrator of BYU ScholarsArchive. For more information, please contact ellen_amatangelo@byu.edu.

BYUキャンパスでの靈的な旅

有泉芳彦

2020年の暮れ

はじめに

1996年から2014年までのおよそ20年間、ペンシルベニア州で、たくさんこの世的なこと、世俗の混沌とした生活を目にし、個人のことについても、家族の関係でも、不安定な生活でした。そんな折、BYU（教会の経営するブリガム・ヤング大学）の日本語教育の長であった渡部先生からの招きで、ユタ州のプロボに戻ってきました。ここでは、大部分の人が教会員で、町の中の至る所で、福音に従っている人たちだからこそ作り上げている美しく、整然とした環境に恵まれています。そして、さまざまなおりに、ここに百数十年前に入植してくれた、パイオニア（開拓者）のことを思うと、御霊を強く感じます。その伝統が、今も彼らの子孫の中に生き続け、その子孫たちを祝福し続けているのです。ですから、他のどの場所にいる時よりも、神様の祝福が、この民に強く注がれていることを実感します。東京での生活やペンシルベニアでの経験と比べると、ここでは、ふと気がついてみると、御霊を感じていることが多いのです。

さて、この随筆の目的は、わたしのように、能力の限られた者が、キャンパスの環境の中で様々な形で目を開かれ、気づいてみると、自分を引き上げてくださる神様の御手が、思いもしなかったところに連れて行ってくださったことを振り返ることです。そして、読んでくださる方々にも、同じような成長が、ほんの些細な努力の積み重ねで起こることを、お伝えしたいと思います。

自分がどのような状態であったのか？

まず、自分がどんなところからスタートしたのか振り返ることが大切だと思います。1972年に改宗した時から、常に教会のことには熱心で、自分としては強い証があると感じていました。一応教会員として行うべきことを誠実にやっていたと自認しています。しかし、自分には限りなくたくさんの欠点や弱点があり、多くの失敗を重ね、たくさんの遠回りをしながら進んでいることも確かなことです。教育の畑での仕事は、30年以上もやっていたのですから、ある程度ベテランの域に達していたと自負するくらいになっていました。ところがです。一番根本的なところから自分を見つめなおすという、目が開かれる経験が待っていたのです。

愚かな自分が陥ってしまう誤りは、「自分の力で～ができた」と思い込んでいることでした。たとえば、「自分は日本の最高学府で、修士号まで得ている。人よりは優れた能力があるのだ」というような慢心が心に忍び込んでいきます。しかし、事実を振り返ってみると、実は、自分の能力は、「やっと平均的な日本人の知的なレベルである」と思うべきだと痛感するので

す。なぜか？人生とは不思議な展開をするもので、母は、不出来なわたしにも大きな期待を寄せて、励ましてくれていました。ですから、勉強が好きになりました。実は、60歳も半ばを迎えたわたしが、がんの手術後、姉のところで世話になっていた時、きわめて興味深い事実気づかせてもらったのです。母は、わたしに黙っていたのですが、3人兄弟の中で、わたしの知能指数が一番低かったというのでした。勉強は不得意で音楽の道に進んだ兄と、結局、女子美大に進み、日本刺繍を専攻した姉と比べても、私の知的な素養が、とても低かったようです。しかし、読書が好きになって、寝ても覚めても勉強のことを考えていたことは少しは助けになっていました。それでも、東京大学の入学試験の直前、まだ、求道者であった自分やほかの受験生のために、断食し、神権の祝福を授けてくださった元神殿長の井上龍一ビショップの配慮があって、ピクニック気分を受験できたというような神様の計らいがあったからこそ、学問への道が開かれたことも思い出されます。

最初の第1歩

そのような経緯があっても、まだ、自分は経験も知識もあるから、自力でよく教えられると考えていました。それが、2014年に、BYUで教え始めた自分の状態です。2015年ごろだったと思いますが、自分が学んだ教育学の研究で、大学に貢献したいという希望があったこともあり、当大学の創設以来、総長や教会の指導者が講演した内容で、特に顕著な話を集めた講演集があります。英文で、百数十ページにも及ぶ資料で、英語では、Foundation Documentsと呼ばれるもので、このキャンパスにおける教育の土台となる理念をまとめたものですが、ほとんどの教員が、たぶんこの全部は読んではいないだろうなと思いつつも、思いを込めて、丁寧にマークしたり、コメントを書き込みながら読んだのです。特に印象に残ったのは、ブリガム・ヤングがその当時の最初の学長であったカール・メーザーにあてた勧告でした。それは、ようするに、「『2たす2は4』のような基礎的なことを教えるときにも、御霊によって教えなければならない。」これをどうすればよいかと、素朴に考え始めていました。そこで、その当時、日本語学科の長をしていたゲッセル先生（遠藤周作の「沈黙」を研究したことで天皇陛下から表彰されている優れた研究者であり教育者）に、ヤング大管長の勧告をどう応用すればよいかについて話していた時に、当然、教会の初等協会の子供でも分かるようなことですが、「レッスンの前に祈るということですかね」と言われたのです。実に、恥じ入る経験でした。それを自分はほとんどやっていなかったのです。日本語教育では、もうベテランだと思っていた自分は、自力で上手に教えられると思い、ほとんど祈って準備していませんでした。

そこで、毎回、授業を準備するために祈り、自分のオフィスから教室に向かうときに祈り、そして授業が終わってからまた、報告の祈りをするという3つの祈りを始めました。3番目の祈りがいい加減になることが多いですが、何とかこれが習慣になってきました。祈っていて、だんだんはっきり意識するようになったのは、学生のニーズをしっかりと理解して教えるというポイントです。学生のほとんどが日本で伝道したことのある帰還宣教師で、自然と、クラスの初めに、学生の一人に日本語で祈ってもらうことも始まりました。それで、少しずつ教え方が充実していきました。そうこうしているうちに、2017年の夏に日本でがんの手術を受けることになり、秋学期はお休みさせてもらい、また、次の冬学期から、ゆっくり歩くことはできてもジャンプすることもままならないような体調ながら、教え始めました。

一つの大きな転機

2018年の秋のことです。ある日の授業の初めに、学生が祈った中で、「聖霊の力を受けて学べるように」ということばが、ずしんと心に響きました。それ以来、「聖霊と共に学ぶ」というテーマで学生たちと日本語で議論を重ね、作文にも書いてもらったものをまとめて、インターネットで自分たちの記事を発表することまでやりました。宗教教育の学部で教えているタイラー・グリフィン先生と協力して200人ぐらいの学生にアンケートを取って、彼らが「聖霊と共に学ぶ」ことについてどう思っているのかを調べました。分かってきたことは、ほとんどが教会員で、帰還宣教師も多い大学であっても、勉強のために、具体的で頻繁に日々の学習のために祈っている学生が少ないという現実です。大きな試験とか、難しい課題が出された時とかにはちゃんと祈っているのですが、日々の学習や宿題をする時などには別に祈らない学生が多いのです。教える側でも、すっかりうかつであった自分には、祈りが足りないと言って、責める立場にはまったくなかったのですが、この傾向を克服するように力を合わせていこうと決意を固めました。教えるということは素晴らしいもので、あることを学生に勧めれば勧めるほど、自分の方がその影響力を受けるものなのです。

学生と話し合っているうちに、「聖霊の影響力のもとで活動をする」ということは一体どういうことなのか、回復された福音の光の下で、もっと追求してみたいという願望がむらむらと起こってきました。これこそ、まさに聖霊の賜物を受けている教会員に与えられている超まれな特権ですから。そこで、目標を立てました。翌年の春のある時期までに、「教義と聖約」を10回読んで、この点についての回復された福音の原則に関して考えを深め、研究するという目標で、大事なところをマークすることにしました。結局、日本語で6回、英語で4回読んで、85ほどの聖句を選び、それをプリントして、何度も何度も復習しながらその意味を考えて、「聖霊と共に学ぶ」というテーマを理解しようと努めました。

そのような努力をして、自分がこのテーマについて深く考えていた2019年の春頃です。ふと、昔、東京神殿の別館に泊まった時、北海道から来た兄弟たちと寝室の中で話したことを思い出しました。あるステーキ会長の経験がある兄弟が、証を伝えてくれたのです。彼は、働いている会社の製造過程について、神権の権能で毎日祝福しているというのでした。そんなことを試したことはなかったのですが、自分が霊的なことを探求しているという流れの中で、キャンパスをメルキゼデク神権の権能によって祝福してみようと思い立ちました。それで、その春から、キャンパスに行くとき、歩きながらのことが多いのですが、神権の権能によって祝福し始めました。「BYUが世の光となれるように」「研究も今の何倍もの知的生産性によって進められるように」などと祝福し始めたのです。

心の中の祝福の祈りは意外な結果をもたらす

その秋、2019年の10月の半ばですが、そのように何百回となく祝福をしてきたことからと思われる結果が洪水のごとく自分に降り注がることに気づきました。非常勤講師である自分には、研究してその結果を論文で発表するという責任を受けたり、そうするように励まされることはほぼゼロです。ですから、それまでやっていたのは、教えること以外には自分の興味のある

ることをたまに学び、それを教えることに応用するなどのことだけをやっていました。論文を発表するとか、組織だった研究は特に何もしていませんでした。しかし、上記のように、研究に関する知的生産性について何度も何度も具体的にキャンパスを祝福しているうちに、自分は教職員の模範になって、この点においても大学が発展する助けをしなくて、どうするのか？という自問が心の中に広がってきました。そして、それを考え続けているうちに、あふれるほどの研究に関するアイデアが沸き起こってくるのでした。それこそ、天から土砂降りの雨が降り注ぐような具合で、2か月ぐらいで、レターサイズの白い紙に、アイデアを書き連ねて、300ページにもなってしまったのです。それ以来、研究開発が着々と進んでいます。ただし、自分の力に自己満足せず、神様の力が働いていることをしっかり認めるときには、スムーズに、思った以上に進み、自分でできると高をくくってやっているときには、しばしば挫折が起ってしまいます。

キャンパスでの一連の経験から学んだこと

では、以上の経験から学んだことを、ほかのことにも応用できるようにすることも考えながらまとめてみます。

祈りの大切さが、まず先頭に來ます。教会員としては、初歩中の初歩でありながら、これをするのは、めっちゃくちゃ難しい。わたしのような人間は、すぐ自分のやりたいように行動しがちです。すごく大事なことについて、断食したり神殿に行って祈ったりします。そして答えを受けて、何かを始めますが、その実、それを実行する方法について詳しく祈り求めることを怠っているのです。つまり、自分のやり方で、やりたいようにそれを実行しようとするから、なかなかうまくいきません。それで、祈りの答えが間違っていたのですか？いや、そうではないのです。答えはよくても、そのやり方が悪いのです。神様の方法でやらなければならないのです。正直言って、わたしはまだこのところがうまくいかなくて、それを改善しようと思って頑張っているところです。大事なポイントで、しばしば主に伺いを立てて、主の方法で実行に移すように、克己心を働かせ、自分には不得意な方法でも、謙遜になって失敗しながら、ぎこちなさを乗り越えて、頑張り続けることです。何百回も失敗しながら、すこーーしだけでも、上手になるように努力し続けたいと思っています。

自分の頭の中で考えていることには限界があります。ですから、**たくさんの人たちからいろいろな助言をもらいます**。わたしの場合、学生たちからもたくさんのことを教えてもらいます。教会の中で会う、プライマリーのこどもたちからでもたくさん学ぶことがあります。自分とは違った視点から物事を見ている人たちと接することはなんと素晴らしいことでしょうか。ある時、ビショップの娘さんである10歳ぐらいの女の子に、自分が研究している難問について、子供でも分かるようなやさしい言葉で説明して、尋ねたところ、博士課程で勉強しているという兄弟からよりも適切なヒントをもらうことができました。そのような小さな子供たちからでも、神様がわたしたちの目を開いてくださるような貴重なヒントをもらうことができます。

辛抱が要ります。「聖霊と共に学ぶ」ということについて、理解が深まるには時間がかかります。それに関して、「教義と聖約」を10回集中して読んで考えても、まだ表面をちょっと

かじった程度です。まだまだ理解を深めなければなりません。つまり、聖霊の語りかける「霊的な言語」を的確に理解して、その影響力をもっと受けられるようにするためには、それなりのち密な訓練が必要なのだろうと考えています。大変そうですが、少しでもその成果が上がっただけでも、素晴らしい祝福が生活の中に舞い込んできます。努力する甲斐があります。何の前触れもなく、突然堰を切ってどっと降り注ぎ始めた啓示が起こる前に、数か月間、毎日のように、キャンパスを祝福し続ける必要がありました。それがいつ起こるのか、予想もしていませんでしたが、毎日心の中で祝福しても、目で見えるような変化は何もありませんでした。ずーと長い間。何も起こらないことを覚悟しておく必要があります。しかし、一つのこととは最初から確かです。心の中にあたたかな、平安な気持ちがあることです。ですから、続けていかれました。

祝福をすることは、もっと頻繁にできる。キャンパスを祝福した経験から、今度は、会って話をする人たち一人一人を祝福してみようと思いました。特に自分の伴侶に対して、しばしば神権によって特別な祝福を、心の中でやろうとしています。また、話しかける前に、祈りの気持ちで、正しい態度で、御心にかなった方法で、語りかけることができるように祈りつつ、伴侶やそのほかの人たちと話すように心がけています。でも、まだできていないことが多いので、点数にすると20点ぐらいかもしれません。でも、0点よりもいいです!!!このように祈ってから、相手に話しかけるようにしていると、（ところで姉妹たちは、神権によって祝福しなくて、祈りによってその人に祝福がもたらされるようにすることができますから、効果は全く同じであると考えられます）、なんか素晴らしい結果が起こっているようです。そして、驚くことは、そのことによって、たくさんの祝福が自分に戻ってくるということです。